

◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆

これまでのあらすじ

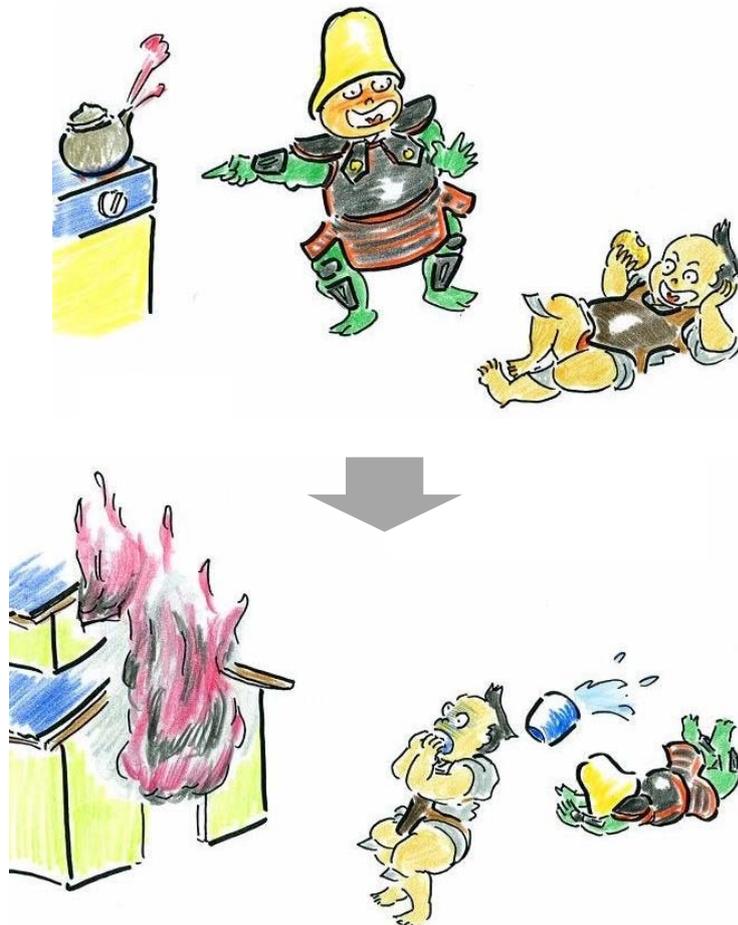
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の中間^{ちゅうげん} ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだあい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.32

「だ、旦那さま・・・い、一緒の布団に入れて下せえよお」とご助が拙者の
布団に潜り込んできましたな。

「あ、暑いじゃろうが。自分の布団で寝るんじゃ。」と申しても

「い、嫌ですよ。あんなの見たら一人で寝れねえですよ。旦那様は寝れるんで
すかい？」と体を震わせながら更に深く拙者の布団に潜り込んできたのじゃった。

あんなのと言うのは、往年の大女優『赤座美代子先生』の牡丹灯籠のことじゃ。

お露の亡霊に取りつかれた新三郎が、黄泉の世界へと引き込まれる映画じゃった。



「だから見るなと言ったじゃろ。儂の忠告を無視するからじゃ。ええいむさ
苦しい奴じゃな。暑くて寝れんわい。」と拙者は取りすがるご助を置いて番小
屋からお屋敷の庭へと出たのじゃった。

7月15日。新盆を迎えたこの時期にしては、いささか蒸し暑い夜ではあった。

「ふうう、梅雨ももうそろそろ明ける頃かのお」と独り言ちながら、ふと、
お庭の池端を見やると、夏草の陰にぼんやりとした明かりが差しておった。

「おや、蛍かの？じゃが蛍にしては時季が早いような・・・」などと思って
いるうちに、その薄明りの中に女性の顔が！



「ひっ？ひいいい??？」と肝を冷やし、腰の抜けた拙者は這いずりながら番小屋へと入るや、ご助が潜っておった拙者の布団に頭から潜り込んだのじゃった。

「ど、どうしたんでやす？」と心配そうに拙者に尋ねるご助に

「で、で、出たんじゃ。」と拙者が言うと

「で、でっ、出たあ？やっぱり出たんですかい？ど、ど、どこに出たんですかい？」

「い、池端じゃ。不意に池端に女の顔がこうやって。」

「ひいいい、ま、真似しなくてもようがすよ。」



「ううう・・・怖くて小便にも行けんぞ。」

「こ、困ったでやす。あっしもサッキから我慢してるんでさ。いっそのこと一緒に寝小便にしやせんか？」というご助の意見に思わず『おお』と答えそうになるのを我慢して

「ば、馬鹿を申すでない。厠へ・・・一緒に厠へいかんか。」とご助と連れ立って厠へと向かったのじゃ。

先に厠へ入った拙者が

「ご、ご助。ご助よ、そこにおるのじゃろうな。」と繰り返すと

「い、居ますよ旦那様。あっしの時もちゃんと居てくだせえよ。」とご助も繰り返すのじゃった。

用を足し、ご助と入れ替わった拙者じゃったが、厠に通じる縁側から見えるお屋敷の池を見るともなしに見ておると、不意に件の女の顔が。



「ギョエエエツ」と悲鳴をあげ、逃げ出す拙者を「ま、待ってくだせえ」と
厠のドアを蹴破ってハンケツのご助が後を追ってきたのじゃった。



「あーあ、ふんどしがベチャベチャですぜ。」と言いながら、意外なことに
ご助は平然と厠へと戻っていったのじゃった。それを見送りながら

「ご、ご助の奴どうしたというのじゃ。ゆ、勇気があるではないか。」と、
拙者は感心したのじゃった。

しばらくして寢所に帰ってきたご助は

「旦那様。次に厠に立つときはあっしが付いて行ってあげますぜ。」と何と
も頼もしい言葉まで。

いよいよ勇気のある奴と拙者は見直したのじゃった。

2時間後。再び催した拙者は大の字になって寝るご助を起こすと、厠に入った
のじゃった。それを見届けたご助は・・・

「アブねえ、あぶねえ・・・さっき厠から出た時に池の中を泳ぐ姫様の姿を
見かけなかったら、この先旦那様から小便垂れの小心者と笑われるところだっ
たぜ。ひひひっ、今度は旦那様を小便垂れに・・・」と言うと釣り竿の先に取り
つけた、アルコールをたっぷりと浸み込ませたガーゼに火を着けたのじゃった。

ポワーンと、アルコールの臃げな炎が、さながら鬼火のように燃え上がった。

「し・・・、しえ・・・ま、しえん・・・ま、しえんさまあ」とご助は段々と
声音を重ねながら、炎を厠の窓へ・・・

「ひいっ・・・？ うぎゃああああ・・・！！」と不覚にも拙者は厠の中で悲
鳴を上げ、気を失ったのじゃった。



「いーひひひひっ！」と笑い転げるとご助じゃったが、悪いことは出来ぬもの
じゃて、釣り竿の炎が風に吹かれてご助の背中に。

「ひっ？ ひいいい、熱っ、あちちち・・・」と叫びながらお庭に出るとそのまま池へと飛び込んだのじゃった。

「つ、冷たっ。ひいいい、・・・た、助かったあ・・・」と、次にご助が目を開きましたのは自分の布団の中じゃった。

布団の中だというに、ひんやりとした股間の感触、この感覚は以前にも・・・。

「やってしもうた・・・つ、冷たいのお。し、しかし酷い夢じゃった。前にも不動明王さまから、火遊びはダメじゃと叱られておったのに・・・」と反省し、寝小便を恥じながら起きようとしたご助じゃったが



「あ痛っ？・・いててて・・なんじゃこれは？」と痛みを覚え、背中をさするとそこには、確かに赤く腫れた火傷の跡が・・・

「こ、これは！？・・ま、まさか昨夜のことは全て真実・・・・じゃったのか？」と、そこへ

「ぼすけ、ちえんから聞いたじよ。火傷しちゃんだって？」と姫様が声を掛けてこられたのじゃった。

「あ、姫様。面目ないことでございます。昨晚遅くに姫様が池で泳いでおる姿をお見掛けして、旦那様を脅かそうとして、このザマですじゃ。」とご助が答えると

「池？えんちゃんは昨日の夜、牡丹灯籠って怖い映画をみちゃからパパとママとシャン人で川の字になっちえ、しゅぐに寝たからちらない。」と答える姫様の言葉に

「・・・・・・じえじえじえ！」と驚くご助。

そのご助の耳元で

「ご・・・、ごす・・・ま、ごすけ・・・ま、ご助様あ」という微かな声が・・・

「ひiiiiiiii・・・」と気を失うご助じゃった。



(つづく)